

比較文化研究に対する一つの 統計的分析の試み II*

—態度数量化の一方法 IV—

林 知己夫

(1973年3月 受付)

A Statistical Approach to Cross-Cultural Study II
—Japanese national character and Japanese-Americans in Hawaii—

Chikio Hayashi

The English version will be published in the *Ann. Inst. Statist. Math.* later.
The Institute of Statistical Mathematics

これは、比較文化研究に対する一つの統計的分析の試み I の質問関連分析において述べてあるところを別観点からながめてみたものである。回答パタンの総合的分析とも言うべきものである。この方法論の大筋は林編「比較日本人論」(中央公論社、1973年8月)75頁-122頁に示してあるので、これを補う意味で話を進めることにする。

§1 序

比較研究においては、回答の周辺分布を比較するだけでは不十分である。これだけでは夫々の集団の特色をあらわす考えの筋道 (system of thought) を明らかにすることは出来ないからである。この考えの筋道の差異は、意思の疎通をさまたげ、いわゆる断絶——話の通じないこと、相互理解のもてないこと——の様相をひきおこすものである。同じ scale ではかれるもの同志であればそのスケールの値が非常に異っていても、相手を理解できる。意見内容は異っていても、なぜその立場をとっているかを理解できるが、同じスケールで測ることの出来ないものは相互に理解を絶するものがある。こうした立場から、比較研究を進める必要がおこってくる。

こうしたことが、日本人と日系人での間におこっていないであろうか、ということからみて行きたい。まず、こうした傾向を予想させるものとして次の様な関係が見出された。これは、日本人と日系人との集団で、年齢別に2つの問題——養子に関する問題と大切な道徳で何を選ぶかという質問——における回答、¹「養子の問題」では²「養子をもらう」という回答、³「大切な道徳」では⁴「恩返しをあげたもの」をとりあげてみた。この結果、非常に異った様相が見出されたのである。日本においては、年齢が増加するにつれて両方の回答が単調に増加して行く。一方日系人の方では、二つの回答が相反した傾向が現われてきている。恩返しを選ぶものは年齢と共に上昇するのであるが養子の問題でつがせるという回答は減ってきているのである。これ

* これは、林知己夫、西平重喜、鈴木達三、野元菊雄、青山博次郎の共同研究によるハワイ日系人調査 (T. Suzuki, C. Hayashi, S. Nishihira, H. Aoyama, K. Nomoto, Y. Kuroda and A. K. Kuroda, A Study of Japanese-Americans in Honolulu, Hawaii, *Ann. Inst. Statist. Math.* Supplement 7, 1972) において得られたデータの分析に基くものである。分析にたずさわった大久保道子、高橋和子、林文の諸君に深く感謝するものである。また、本論文で §6 以下鈴木達三氏との討議にもとずくところも多くあり、あわせて感謝するものである。

ら2問の回答を規定する考えの筋道が異っていると見られるのである。

周辺分布が同一であっても、考えの筋道が異なるということがあるわけである（前掲書）。

我々として、こうした関係を明らかにするためにまず、日本の大きな特色と言われている義理人情に関する質問を用いてみた。

§2 義理人情に関する質問

我々は義理人情に関する質問として次のものを用いた。

とりあげた質問のうち、○は伝統的と見做される（義理人情的と見做される）回答、●印は伝統的でないと見做される（義理人情的でないと思われる）回答を示す。これらの質問は直接義理人情的の行動に関するものやその素地となるべき潜在的義理人情志向をみるための質問から成っている。

1. 「先生が何か悪いことをした」というような話を、子供が聞いてきて、親にたずねたとき、親はそれがほんとうであることを知っている場合、子供には
「そんなことはない」
といった方がいいと思いますか、それとも
「それはほんとうだ」
といった方がいいと思いますか？
○ a. そんなことはないという ● b. ほんとうだという
2. 南山さんという人は、小さいときに両親に死に別れ、となりの親切な西木野さんに育てられて、大学まで卒業させてもらいました。そして、南山さんはある会社の社長にまで出世しました。ところが故郷の、育ててくれた、西木野さんが「キトクだからスグカエレ」という電報を受けとったとき、南山さんの会社がつぶれるか、つぶれないか、ということがきまってしまう大事な会議があります。あなたはつぎのどちらの態度をとるのがよいと思いますか。よいと思う方一つだけえらんで下さい？
○ a. 何をしておいてもすぐ故郷へ帰る
● b. 故郷のことが気になっても大事な会議に出席する
3. いまの質問では、悪人が死にそうなきを、うかがいましたが、もしキトクなのが悪人ではなくて、南山さんの親だったら、どうしたらよいと思いますか、どちらかえらんで下さい？
○ a. 何をしておいてもすぐ故郷へ帰る
● b. 故郷のことが気になっても大事な会議に出席する
4. あなたが、ある会社の社長だったとします。その会社で、新しく職員を一人採用するために試験をしました。入社試験をまかせておいた課長が、
「社長のご親戚の方は2番でした。しかし、私としましては、1番の人でも、ご親戚の方でも、どちらでもよいと思いますがどうでしょうか」
と社長のあなたに報告しました。
あなたはどちらをとれ（採用しろ）といえますか？
● a. 1番の人を採用するよういいう
○ b. 親戚を採用するよういいう
5. それでは、このばあい、2番になったのがあなたの親戚の子供でなくて、あなたの悪人の子供だったとしたら、あなたはどうしますか？（どちらをとれといえますか？）
● a. 1番の人を採用するよういいう
○ b. 悪人の子供を採用するよういいう
6. ある会社につきのような2人の課長がいます。もしあなたが使われるとしたら、どちらの課長につかわれる方がよいと思いますか、どちらか一つあげて下さい？
● a. 規則をまげてまで、無理な仕事をさせることはありませんが、仕事以外のことでは人のめんどうを見ません
○ b. 時には規則をまげて、無理な仕事をさせることもありますが、仕事のこと以外でも人のめんどうをよく見ます
7. つぎのうち、大切なことを2つあげてくれといわれたら、どれにしますか？
○ a. 親孝行をすること ○ b. 悪返しをすること
● c. 個人の権利を尊重すること ● d. 自由を尊重すること

§3 義理人情の問題のパターン分類その1

まず、各質問の回答を別個に取扱い——質問7問、回答は8個となる——パターン分類の数量化で回答パタンの分類を行ってみた。

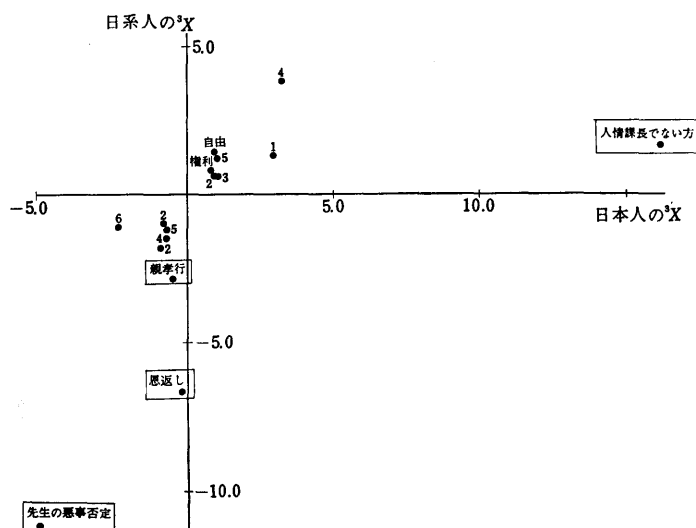
a) まず、日本人全体と日系人全体の結果を示そう。

パターン分類の数量化によって示された回答の布置は前掲書に示す通りである(93頁)。 1X は最大の latent 根に対応するベクトル、 2X は、その次に大きい第2の根に対するベクトルである。 3X は第3に大きい latent 根に対するベクトルである。その日本人の latent 根は夫々 0.22, 0.19, 0.13 であとはずっと小さくなる。一方日系人の方は夫々 0.22, 0.21, 0.15 であとはずっと小さくなる。

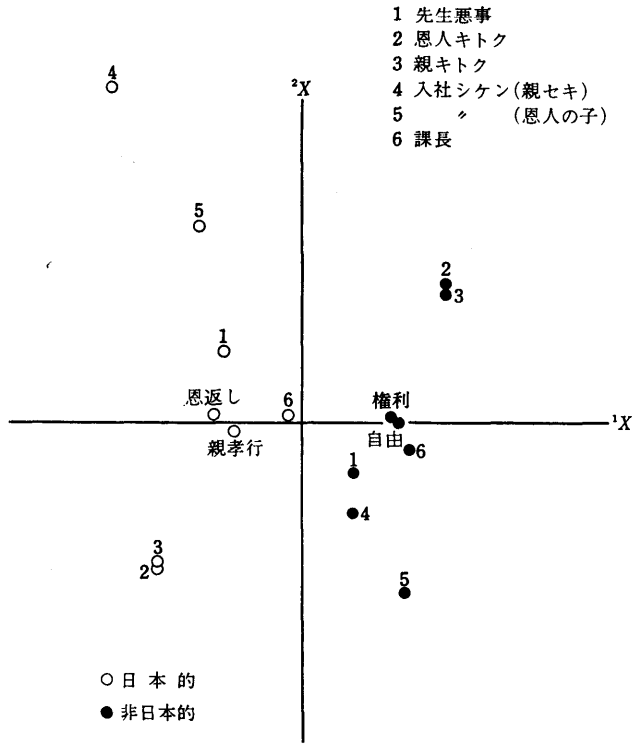
さて比較は大変面白い。みたとところ日本人と日系人の図柄は異っている。日本人では 1X はいわゆる伝統的——非伝統的といった軸をあらわしている。つまり、これは、義理人情的——義理人情的でない、という回答をはっきり示す軸となっている。一般的表現を借りれば、個人的人間関係重視か否かという様に言ってもよい。第2番目の 2X は「現実的な配慮を行っているが義理人情的」——「個人関係を重くみながら近代的」といった軸である。これは質問の2, 3における回答からそうなのである。

質問2, 3とは「会社の会議への出席」と「恩人又は親の危篤のため故郷へ帰る」と言う二つの態度を比較させ、どちらを選ぶかを回答させたものである。この問題は次の質問4, 5と似ているのであるが、ここに出た結果は異ったものになっているのである。質問2, 3における義理人情は現実的の観点ではなく、文字通りの義理人情に関するものであり、質問4, 5における義理人情は、いわばみせつけの義理人情的回答(現実的でありながら伝統志向と言う所以である)ということが出来る。この質問2, 3の義理人情的でない回答と質問4, 5の義理人情的回答がむすびつき——この逆傾向も成立している——これが2番目の軸で有力なものになっているのは興味深い。2次元の図表でみると義理人情的な回答で質問4と5、質問2と3、その他の質問という3群が認められる。一方義理人情的でない方もこれに見合う形が出ているがそれほどはっきりした形は出ていない。

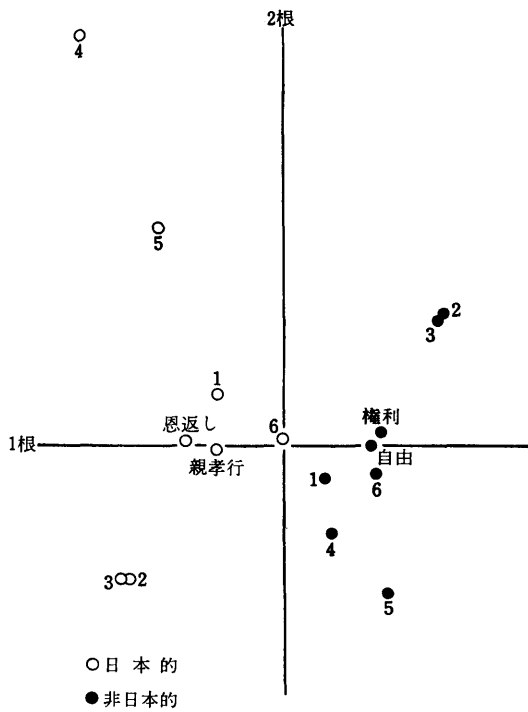
日系人の方に注意してみよう。 1X の軸の方は日本人の方の 2X 軸に対応している。 2X の軸は日本人の方の 1X 軸に対応している。即ち2次元の意味では回答の図柄の相対的位置は全く似ているのである。つまり回答のむすびつきの相対的關係がにているのである。このことは日



第1図 日本人と日系人の 1X (ともに分散を1として目盛る)



1963年



1968年

本人の図柄を 90° 時計の針の方向に回転して重ね合わせると非常によく一致することからはっきり解る。

大局的に言えば、日本人と日系人とは同じ様な回答の結び付きを示している、つまり回答肢の星座とも言うべきものは同じなのであるが、その重みのおき方が異っているために回転がおこっているものと考えられる。

		最 大	第 2
日本人	20-34	0.21	0.19
	35-49	0.23	0.18
	50-	0.23	0.18
日系人	20-34	0.24	0.20
	35-49	0.23	0.22
	50-	0.24	0.21

なお、全体でみたとき日系人の最大 latent 根と第 2 に大きい latent 根が近く、多少疑問がこのころので年齢別に行った結果をもあわせて検討してみた（この細かい記述は前掲書 98 頁, 99 頁にある）。

日本人においては、20-34 歳で最大と次のものとの幅はせまいが、あとは開いている。日系人については、35-49 歳のところの幅はせまく、移行型をあらわしているが 50 歳以上では開いている。根の差は、小さいのであるが、上述の様なシステマティックな傾向が出ていることからみて、

前掲書の議論は、妥当性あるものと考えてよからう。

3X は、第 3 番目の latent 根に相当するベクトルをあらわす軸である。第 1 図をみよう。 3X の値を日本人と日系人とを関係付けて目盛ったのが第 1 図である。45° の線上にのれば同じ構造をもつことになる。日本人と日系人の間のいちじるしい差は 6 の人情課長でない方と 7 (b) の恩返しである。日本人の 6 の人情課長でない方は特異的なものであるが日系人ではそうではない。7 (b) の恩返しは日系人では特異的なものになるが日本人ではそうではない。

§4 義理人情の問題のパタン分類の信頼性 (reliability)

日本人と日系人との差異が認められたのであるがこの結果に信頼性があるかどうか検討しておくことは重要なことである。我々がさきに用いた調査は、1968 年の全国調査のものである。全く同じ調査が 1963 年の全国調査で行われている（標本地点は異なる）のでこれを用いて同じ

	最 大	第 2	第 3
1963	0.24	0.19	0.14
1968	0.22	0.19	0.13

計算を行ってみた。その結果は第 2 図に示す様に全く同様に（上下重ねてみれば殆ど一致してしまう）、信頼性のあるパタンであることがわかった。

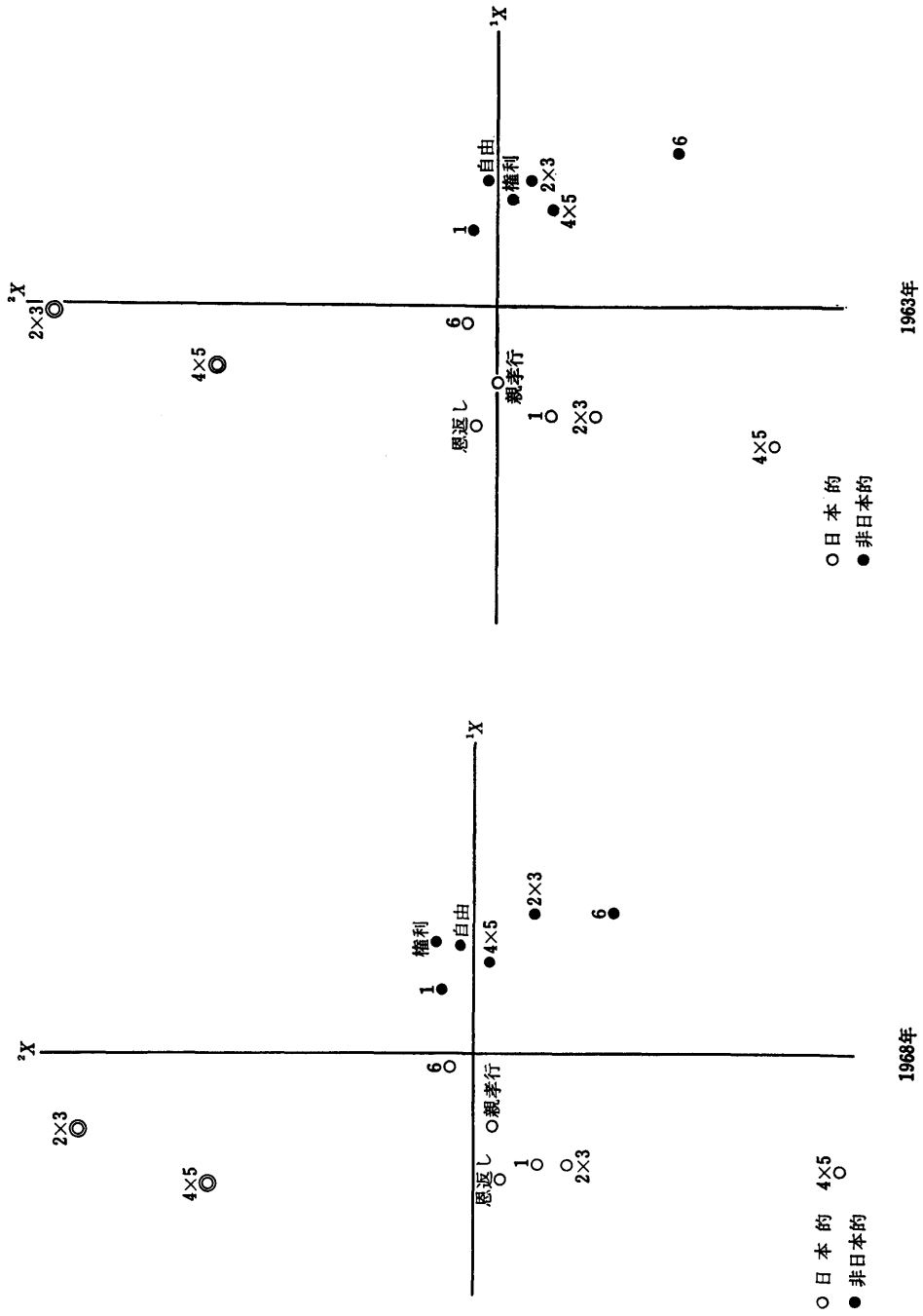
このときの latent 根を比較してみると左表の様になった。

§5 義理人情の問題のパタン分類その 2

質問は同じであるが、ここでは回答のとり方を異ったものにして分析を加えてみよう。

前に問題になった質問 2, 3 と質問 4, 5 において回答のとり方を変え、cross table にしたものを用いた。これは夫々の 2 問で態度をどう変えるか、また変えないかを重要視して回答をとって検討を加えるためである。

	伝統的	近代的
質問 1	否定する	○ ほんとうだと言う。
質問 2×3	親戚のとき 1 番	◎ ともに 1 番。
	恩人のとき恩人の子	
	親戚及び恩人の子	
質問 4×5	親戚のとき会議	◎ ともに会議。
	恩人のとき帰る	
	ともに帰る	
質問 6	人情課長	○ 人情課長でない方。
質問 7	恩返し	○ 権利
	親孝行	○ 自由



第3図 日本人について

という形である。◎は特に昔から義理人情的と言われていた回答パターンである。回答肢としては、ここにとりあげたものだけにとりあげた。日本人の結果は前掲書 105 頁にあるが¹Xにおいて義理人情的とそうでないものがわかる。これは別々に回答を処理した前述のものと全く同様の出方である。²Xにおいては、義理人情的の回答の中で昔から義理人情の典型的回答と言われていたもの(◎)とそうでないもの及び他の質問の一般の義理人情的の回答とがきれいにわかれてきているのである。義理人情的でない回答の方では、²Xによってそれほど分離しない。この2次元平面によって非常に明快な図柄が出てきたわけである。

なおこの図柄(星座)の信頼性をみるため1963年の分析結果を第3図に示すが、全く同一の形をしていることがわかる。上述のことは日本人において信頼性があるものとみとめられる。

latent 根		
	最大	第 2
日本人 1963	0.26	0.20
日本人 1968	0.24	0.19
日系人	0.25	0.20

日系人の結果については前掲書に示す通りである。

なお、ここで latent 根を示すと次の様になる。
いちぢるしい差はない。

§6 他の質問群における回答構造

まず次の様な立場で質問をとらげた。回答が、yes or noの形ではなく中間の回答があり得る様なもの、これは行為の決定をせまるものではなく、考えの中であって、「あれかこれか」ではなく中間のものがあり得るものと言うものにとりあげた。これは日本の調査で中間の回答のある質問を主としてとりあげることになった。これらの質問はハワイとの差が大きいと認められたものである。これに、ハワイといちぢるしく差のあった質問 #4.5 金は大切と教えるかの質問を加えてみた。回答を3つにわけ○印が日本的●が非日本的、△が中間ということにした。質問4の○と△とは一概に言い難いのであるが一応この様にした。また質問6では、日本的なのはむしろ●の方なのであるが、現在の日本では○の方が非常に多いので、これを日本的としておいた。この点には注意していただきたい。ここでは、話をわかりやすくするために、日本的—非日本的と言った表現をとったが、前掲書に示す様な別の解釈の方がより望ましいことと思われる。質問を次に示す。

- 子供がないときは、たとえ血のつながりがない他人の子供でも、養子にもらって家をつがせた方がよいと思いませんか、それとも、つがせる必要はないと思いませんか？
○1 つがせた方がよい ●2 つがせないでもよい、意味がない
△3 場合による
- あなたは、自分が正しいと思えば世のしきたりに反しても、それをおし通すべきだと思いますか、それとも世間のしきたりに、従った方がまちがいないと思いませんか？
●1 おし通せ ○2 従がえ △3 場合による
- 自然と人間との関係について、つぎのような意見があります。あなたがこのうちで真実に近い(ほんとうのことに近い)と思うものを、ひとつだけえらんで下さい？
○1 人間が幸福になるためには、自然に従わなければならない
△2 人間が幸福になるためには、自然を利用しなければならない
●3 人間が幸福になるためには、自然を征服してゆかねばならない
- あなたはつぎの意見の、どちらに賛成ですか。1つだけあげて下さい？
●1 個人が幸福になって、はじめて日本全体がよくなる
○2 日本がよくなって、はじめて個人が幸福になる
△3 日本がよくなることも、個人が幸福になることも同じである
- こういう意見があります。
「日本の国をよくするためには、すぐれた政治家がでてきたら、国民がたがいに議論をたかかわせるよりは、その人にまかせる方がよい」
というのですが、あなたはこれに賛成ですか、それとも反対ですか？
○1 賛成【まかせる】 △2 時、人による
●3 反対【まかせっきりはいけない】

6. 小学校に行っているくらいの子供をそだてるのに、つぎのような意見があります。
「小さいときから、お金は人にとって、いちばん大切なものだと教えるのがよい」
というのです。あなたはこの意見に賛成ですか、それとも反対ですか？

○1 賛 成 ●2 反 対

ここで再びパタン分類の数量化を行ってみると latent 根は右のようになる。

日本人と日系人との間にいちぢるしい差は認められない。

日本人についてみると、(前掲書 111 頁) 1X において日本的回答と非日本的回答及び中間的回答とがきれいに左右

に入り混ることなく別れ、 2X において、非日本的回答と中間的回答が上下にわかれる。このとき、日本的回答は 2X によってほとんどごかず、両者の中間に位すると言ったきわめて明快な図柄が得られるのである。 1X は日本的非日本的と言うことになるが、よく回答の内容を検討してみると、むしろ日本における都会的一田舎的と言った表現の方がより適切であろう。また、これには近代的一伝統的というものも加味されているが、これのみで説明しきれないものがある。養子の問題ではつがせる(農業は固定資産の上に成立するので家はつがせる必要がある)、しきたりには従う、自然には従う、国と個人では、国がよくなって始めて個人がよくなる(全体→個人の考え)、すぐれた政治家が出たらまかせる、金は大切と教える(田舎では現金はきわめて大切なものとされている)の様な、田舎的(第1次産業的)と言った方がよい回答とその対比(上述の反対もしくは簡単に割切らないでよく考えると言った都会的な考え)が出ているのである。 2X ははっきり割切って考える、割り切らないであちこちよく考え、回答を保留すると言った様なことを弁別する軸とみられよう。

日系人については、義理人情の時とは違い、日本人と異った様相が見られるのである。 1X によっても日本人と異なる様相が見られるし、 2X によっても、はっきりした中間回答をわける姿が出ていない。中間回答の内容が日本人と異っていると考えられるのである。しかし中間回答はどちらかと言うと日本のそれと似た方の場所にあるが、○と●とは入り混り甚だ異った形が出ているのであるからその内的意味は異ったものと見るべきである。日本においては日本的回答の○は非常に小さい領域に凝集しているが、日系人では大きくバラツいている。同じことは●についても言えるのである。これは、日本人においては、それぞれの質問及び回答が我々の意図したごとく関連性が高く回答の○、●において凝集性が高いことが示されているが、日系人に対しては、我々が考えているのとは異った考えの筋道のあることが示されている。しかもこの考えの筋道の異り方が義理人情に関する質問群の時に出てきたのとは違った性質のもので、「相対的關係が一致して重点のおき方が異なる」と言うものではなく構造的に異ったものであると言うことができる。

次に、日本人、日系人それぞれの数量化された値(2次元)を用い、属性別に平均点を出してみた、ほとんど 1X 軸に沿って数値がならんでいるのは注目される。日系人においては 2X 軸は全くなく、 1X 軸のみとなっている。これは各属性別にみると 2X 軸に対しては平均して上下に回答がバラまかれ、特色のないことを示している。日本人についてはやゝ右下りの直線的関係があるが、これは大学卒、20歳台、高校卒に非日本的回答が多く、中間的回答の少ないことが示されているものとみてよい。日系人とくらべると内容的には全く異なるが両端に大学卒、20歳台(ハワイでは30歳台も含まれる、日本では高校卒が入る)と小学卒、60歳以上がならぶのは興味深い。こうした属性の弁別が 1X 軸によってともに分離されるのであるが、その回答内容は異ったものであることは注目してよい。それぞれの同じ様な属性を弁別する特色はあるが、その内容は異っているという面白い姿である。

§7 さ い ご に

前節の様な状況を日本的一非日本的という観点にしぼってもう少し突込んで、考えてみるこ

latent 根

	最 大	第 2	第 3
日本人	0.27	0.23	0.19
日系人	0.24	0.21	0.20

とにしよう。日系人において日本人とよく似た視点から回答を選択するグループもあるかも知れないが、そうでない視点から回答選択するグループもあると考えられる。それらが入りまじってしまうので全体としては我々からみてすっきりした形が浮び上がってこないのではあるまいか。

我々の用いた調査に用いる質問、特に回答のとり方では、日本的ということは、はっきりしているが、他の極としての非日本的(脱日本的)といったことは、明確に規定されていない場合が多い。したがって、日本的でない考え方、脱日本的とか、全く異った立場からものをみようとすする人が、この調査票にぶつかるとすなおに回答し難い情況に立ち到ることになる。この質問は何を狙って聞いているか真に理解できなくなり、回答にはっきりした筋——脱日本的なら一定の脱日本の観点からの視点、その他の立場なら、その立場からの視点、そうした視点からみて明確な筋——が出なくなってくる。日本人なら日本的—非日本的という共通の理解の上に回答することになるため、回答の姿は、我々に理解し易いものになる。そうでない視点からものをみると回答は我々の立場からはまちまちな姿に見えてくる。

逆に外国人が自分の軸から質問票をつくり、これを我々が調査を受けたとしたら我々の回答は外国人には理解し難いものになるろう。

こうした点を掘り下げて考えることが、比較文化の研究には必要なことである。単純に質問の周辺分布を比較したり、ある一つの立場からのみスケールをつくって比較していたのでは、問題の所在がはっきりしない。回答の関連性を分析することによってこうした問題解明により一歩突き進むことができるようになる。

我々は日本的という立場から分析を加えてきたのであるが、他の立場からの調査——たとえばアメリカ的など——を行って分析を加えたいものと思っている。いずれにしても、立場を明確にしつつ深く分析を加えることが比較文化の研究方法として望ましいものと考えられる。さらにまた、それぞれの立場からみて理解し難いところをそれぞれ解釈し、つきあわせて検討することも比較研究では重要な意味を持つ。

統計数理研究所